

## 第5回アジア養蜂研究協会大会・第7回熱帯養蜂会議合同大会報告

佐々木正己・中村 純

2000年3月19～25日にチェンマイ（タイ王国）に開かれた表記の合同大会に出席したので、その概要を報告したい。

熱帯養蜂会議は2年に一度熱帯地域の養蜂をテーマにした国際ミツバチ研究協会主催の会議で、第1回のロンドン以降、インド、ケニア、エジプト、トリニダードトバゴ、コスタリカと熱帯地域で開催を続け、次の第7番目の開催国としてタイを選定していた。アジア養蜂研究協会が同じ年に別の開催地や時期に独自に大会を開くよりも合同の大会とすることに意義があるということで、タイ王国の古都チェンマイ市での合同開催ということに相成った。アジア養蜂研究協会としては第1回大会をバンコクで開催しており、インドネシア、ベトナム、ネパールを間に挟んで2度目のタイでの開催となった。

### 事前活動

今回この大会をタイで開催するにあたって、大会事務局長を務めたチュラロンコーン大学のSiriwat Wongsiri教授が諸方面での協力を求める事前活動のために1999年12月に来日。Wongsiri教授の旧知の（株）クインピーガー



図1 中曽根文部大臣を表敬



図2 市内のあちこち売られているオオミツバチのハチミツと巣をバナナの皮に包んで焼いたもの

デン小田社長の取り計らいで、中川元農水大臣、農水省、および中曽根文部大臣（当時）を文部省に表敬訪問した（図1）。Wongsiri教授は、さらに各養蜂業界団体を訪問し、大会およびエキスポへの参加を呼びかけた。

### 開催地、チェンマイ

大会開催地となったチェンマイ市は、タイの北部、「北のバラ」とも呼ばれる古都で、日本からの観光客も多い、タイでも有数の観光地である。暑いバンコクを離れて避暑に訪れるタイ人もいるほどのやや涼しい気候が幸いして、周辺地を含めタイではセイヨウミツバチを用いた養蜂の中心地的な地域である。野生のミツバチも多く、特にオオミツバチはハチミツや巣が市内で売られているのがよく見られる（図2）。観光地であり、宿泊施設、会場に問題がないこと、物価がバンコクよりも安いこと、市内の交通は一方通行が多いもののバンコクのような交通渋滞はなく、予定通りにものごとが進行可能である点、ミツバチが豊富で、北部タイ養蜂協会も、全国で最も結束力があり、種々の活動も盛んなど、こうした点を挙げていけば今回の開催地に最もふさわしかった。

### ワークショップ

アジア養蜂研究協会大会では、会議に併催でワークショップを開くのが定着しつつあるが、今回も最初はいくつかのテーマのワークショップを開催の予定であった。しかし、準備が思う



図3 地元タイの参加者を集めたワークショップ

ように進まず、結果としてタイの養蜂家を主な対象とした勉強会形式のワークショップとなった。それでも講演者は、内外の普及経験者や研究者を集め、全3部構成で形は整ったものになっていた。

会場となったナコンピンホテルは、大会主会場のロータスホテルとは市の対角線上反対側にあたり、また視聴覚機器に一部不備があって、その点では不満の声もあったが、タイの養蜂家や政府関係者など、予想を超える80名近くが出席して、タイらしいスタイルの会議となった。中村は第1部で日本の養蜂事情について、特に生産物の自給状況などを報告(図3)し、タイの養蜂家が輸出先として考え得る市場であることを説明した。先端技術に関する第3部では農水省畜産試験場の天野博士が講演。いずれもタイ語の通訳がついた(発表者がタイ語で話し、英語で簡単に通訳されることもあった)こともあって、参加者から熱心な質問が相次いだ。

### 本会議

大会は35か国、216名の国外参加者に、現地タイの国内参加者を加えると300余名というこの会議としてはかなり大規模なものであった。会場となったロータスホテルには多くの参加者が宿泊しており、その分、早朝から出席者が多く、いずれのシンポジウムも盛会であった。

大会はまず20日のEva Crane博士による基調講演「アジア各地のミツバチと養蜂の歴史」で始まった(図4)。佐々木は玉川大学の卒業式を終えてからの参加となったため聞けなかったが、Crane博士は最近、同様の観点からの

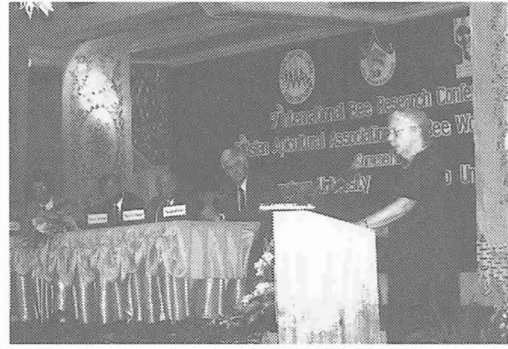


図4 Crane博士の講演

世界規模の800ページからなる大著を発表されたばかりで、いつもながらそのスケールの大きさには圧倒される。学術発表は、1) 養蜂生産物とミツバチ治療、2) ハナバチの多様性、3) ミツバチ生物学、4) 熱帯ハナバチの管理、5) 病気と治療、6) ポリネーション、7) 保護と生態系管理、8) ミツバチ遺伝学の進歩、9) 植物保護とその影響、10) 国際交流と養蜂の持続的発達、の10のシンポジウムに分かれ、さらにその中に、基調的講演、一般口頭発表、ポスター発表が含まれる。

佐々木は、カリフォルニア大学のPeng教授とともにミツバチ生物学部門の進行ととりまとめに当たったため、他の部門の発表はほとんど聞くことが出来なかったが、合同大会ということもあって、全体に過去4回のアジア養蜂研究協会大会に対して発表数の上では圧倒的に大きい、充実した会議となった。

ただ、ここで、ちょっと舞台裏事情を披露すると、熱帯養蜂会議の主催者であるイギリスに本部をおく国際ミツバチ研究協会と現地タイのチュラロンコーン大学の連携が必ずしもスムーズでなく、プログラムの編成が直前まで決まらない一幕があった。アジア養蜂研究協会事務局(玉川大)スタッフの中村、榎本組のインターネットをフル活用した遠隔操作ともいえるウルトラC級の応援がなければ、どうなっていたのか、という感じであった。一方、玉川大で博士の学位を取得したDeowanishさん(現チュラロンコーン大講師)が現地実行委員の中心的役割を担って大活躍してくれていたのは頼もしい限りであった。玉川からのものも含め、5分に

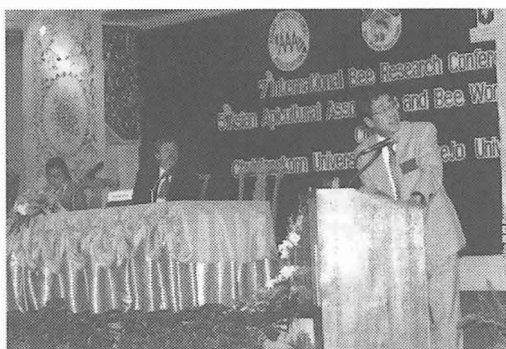


図5 発表する松香教授

1通ほどのペースで届く電子メールに埋もれながらの奮闘という感じだったようだが、過去の大会の準備事情からすると、通信手段が各段に便利になった分、当事者はただただ忙しくなっただけという実感もある。

実際、渡されたプログラムではどの発表がいつどこで行われているか不明で、当日張り出されるプログラムに眼を通す必要があった。ただ、これも今まではともするとただの進行役であったシンポジウムの世話役が、大変有機的に会議に参加するという形にもなり、怪我の功名ではないが、各シンポジウムの世話役を買って出ただいた方には充実した会議だったのではないかとも思えた。

さて、ミツバチ生物学部門では、アジアでは足跡の大きいポーランドの Woyke やグラーツ大学の Kastberger のオオミツバチ関係の報告、次回アピモンディア開催国南アフリカ共和国の Hepburn による飛行メカニズムの発表、Peng の卵内への精子の侵入プロセスに関する精細な観察報告、ミシガン大の Huang が雲南農科大の Kuang 教授らと発表したトウヨウミツバチの JH と分業の報告などが目をひいた。日本からは蚕糸昆虫農技研(さきがけ 21)の笹川博士による「ニホンミツバチによるミツバチヘギイタダニの認識物質」、筑波大の松山博士による「アジア産ミツバチおよびマルハナバチの大顎腺成分」、佐々木らによる「ニホンミツバチのオオスズメバチに対する発熱蜂球による防衛行動のサーモグラフィーによる解析」の発表があった。

その他のシンポジウムでの日本からの発表

は、玉川大松香教授(研究協会会長)のアジアのミツバチ生産物に関する招待講演(図5)、やはり松香らによる中国およびブラジル産プロポリスの比較、同ミツバチ科学研究施設の吉田主任による同所的に生息する在来種ニホンミツバチと導入種セイヨウミツバチの関係の解析、同中村による巣箱デザインと巣内微気象の関係の解析か北大高橋氏によるサベミツバチとトウヨウミツバチの研究用 DNA プライマーについての発表などであった。畜産試験場の木村博士はトランスジェニックミツバチ作りの現状について報告した。トランスジェニック(遺伝子組み替え)昆虫については、ショウジョウバエ以外では困難な状況が長く続いて来たが、1999年に至り、カイコで相次いで成功例が報告された。ミツバチでもごく近々現実のものになる可能性が出てきた。

### Bee World Expo 2000

先行開幕した同時開催のビーワールドエキスポ 2000 は、ロータスホテルからショッピングモールに通じる展示スペースを、美しいランの花で飾りつけた会場で行われた。3月という時期的な問題もあって、日本からは(株)クインビーガーデン(図6)と(株)健康生活グループ友愛の2社に玉川大学ミツバチ科学研究施設の計3ブースのみの出展であった。

タイの養蜂関連企業など計32ブースが参加したが、企業以外に関連省庁やプロジェクトも出展していた。特に、タイ王室の傘下にあるローヤルチットラダプロジェクトも出展。このプロジェクトはタイ各地で農業、手工業関係の技



図6 クインビーガーデンのブース

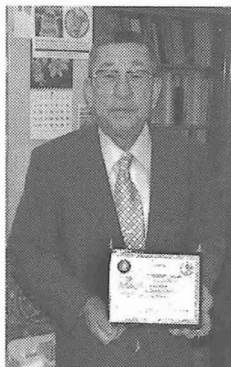


図7 表彰盾を手にした  
末次さん  
(後日、玉川大学で)

術普及を行っているところで、ミツバチ関係の事業ではハチミツ生産とろうそく製造が以前から有名である。国民に人気のある王室関係ということで、一般の見学者の多くがこのプロジェクトのブースに足を止めて熱心に見学していた。

エキスポの初日にはタイ王室顧問でもあるタニン元首相から、アジアの養蜂発展に貢献した人々の表彰が行われ、日本人では、故岡田一次教授と、アジア養蜂研究協会の活動に深い関心を寄せていただき、大会の都度ご協力いただいている末次晃氏(図7)が記念の盾を受け取った(いずれも代理出席)。この表彰式に続いて、タニン元首相がエキスポ会場を巡幸され、各ブースで熱心に説明を受けられていた。初日の来場者にはタイのハチミツを使った飲料水やハチミツワインがふるまわれた。また今回の会議に合わせてタイの在来種ミツバチ4種の記念切手も発行され、会場内で販売された。さらにハチミツのコンテストなども行われた。

なお、今回のエキスポでは(株)クインビーガーデンの小田社長が委員として参画。事前の会場視察などにもご尽力いただいた。

### アジア養蜂研究協会ミーティング

アジア養蜂研究協会は大会期間中恒例の役員および会員ミーティングを開催した。役員人事の他、刊行にこぎつけたネパールの会議録および、機関誌となるAsian Bee Journalについての報告と今後の出版計画、会費の問題などが討議された。

次期開催国の選定では、トルコ、フィリピン、インドの3か国が立候補し、最終的に種々の条件を鑑みて、2年後の第6回大会開催地はイン



図8 ロシアリャザン研究所のエシュコフ博士ド、バンガロールと決定した。

またこの会議には初参加となるロシアのリャザン研究所のエシュコフ博士が特別に発言を求め、ユーラシア養蜂協会の発足を訴えた(図8)。

### 大会参加ツアー

今回もアジア養蜂研究協会では会議の参加ツアーを企画。多くの方に参加していただいた。ツアーはタイ北部のチェンライに入り、ミャンマー国境に当たるメーサイを訪れ、その後、会議、エキスポに合流するという日程であった。またチェンマイ市内でも観光の他に、チェンマイ大学や農業省の養蜂センター(図9)、タイで最大規模の養蜂企業の見学を実施、この時は学生スタッフツアーと合流させていただいた。会議後バンコクを經由して帰国の途についた。短い日程であったが、タイで最も養蜂の盛んなチェンマイを堪能していただいたと思う。

会議の日程が日本の事情で決まるものではないので時期のご希望には添えないが、今後も大会ごとにツアーを企画するので、参加していただけるようであれば幸いです。



図9 農水省養蜂センターで説明に聞き入る